

《論文》

沖縄県竹富島における伝統的作物アワの 栽培存続とその背景 —— 種子取祭との関係を中心に ——

賀納章雄*

I. はじめに

奄美・沖縄の島々（以下、南島）では、水の確保に困難な土地条件にある地域の多いことから、自ずと畑作が農耕の中心となっている。また、日本本土よりも気候が温暖なこともあって、その農耕形態は日本本土と異なる点が多い。さらに、17世紀以降、サトウキビやサツマイモという新来の作物が、それまでの作物体系の中に組み込まれていき、近世琉球王府や薩摩藩がとった農業政策や税制度などの影響もあって¹⁾、それまでの伝統的な農耕形態は大きく崩れていってしまう。その後も、琉球処分、沖縄戦、米軍占領、本土復帰など、日本本土とは異なった歴史的経過の中で、その農耕形態や、それに関わる生活は大きく変化していった。このように、南島の農耕は、南島独自の自然環境や歴史的背景のもとで、日本本土とはかなり異なる面をもって展開している。

このような南島にあって、かつてはアワやムギなどの畑作穀類が盛んに栽培されていた（表1）。これらの作物は、第二次世界大戦後の生活の安定とともに、コメの入手が容易になると、ほとんど姿を消してしまうが、サツマイモなどの新来作物以前より長い間、これらはイネと並んで重要な作物・食物として

*かのう あきお、吹田市立博物館

1) 奄美においては薩摩藩による砂糖の専売制がとられ、沖縄においては琉球王府により砂糖専売とサトウキビ作付制限、そして沖縄諸島で地租税、先島諸島で人頭税をかけるといった政策がとられた。

栽培されていた。そして、その特徴や重要性については、佐々木 [1972; 1976; 2003] や植松 [1974; 1977] が詳しく論じているが、筆者もこれまでにアワなどの畑作穀類を取りあげ、それが南島でどのような地域性をもって展開し、またどのような意味をもって人々の生活文化に関わってきたのかを明らかにしようと試みてきた [賀納 1996; 1997; 1998]。

表1 明治期沖縄県の主要作物栽培面積 (1905年、ha)

	沖縄諸島	宮古諸島	八重山諸島
田 地	6,374	352	2,156
畑 地	37,272	12,212	3,879
イネ (一期)	3,657	301	1,762
イネ (二期)	320	—	—
イネ (陸稲)	—	—	5
オオムギ	606	719	21
ハダカムギ	384	30	29
コムギ	332	522	312
ダイズ	2,189	891	202
アワ	400	2,826	426
キビ	152	64	36
サツマイモ	25,413	2,769	2,370
サトウキビ	6,069	574	44

注) 『明治 38 年沖縄県統計書』による。1 反を 991.7m²として ha に換算した。

その中で、近年、南島各地で栽培の拡大傾向にあるキビに注目して、渡名喜島や粟国島、八重山などでの栽培を事例として、その状況と地域展開を報告し、キビの栽培が現代南島において再び復活した要因について検討した [賀納 2000; 2002]。その結果、キビは農業従事者の高齢化やモチ味をもつ食品としての嗜好性、また換金性を有することなど、各地域の事情に適合する形で、その栽培は拡大の傾向にあることが明らかとなった。その根底には、各地域社会にキビをはじめとする伝統的畑作物を再び受け入れるだけの伝統的基盤があったのである。しかし、反面、今日のキビは、今日の社会に適應する形で栽培され

ている。つまり、キビは、かつて自給的生活を営む上で栽培されていた状況とは異なり、キビの嗜好性、そして換金性といった点が今日の市場経済を基盤とする社会に適応したのである。それゆえ、今日のキビ栽培は、キビ自体は伝統的畑作物といえるものであるが、その性格は今日の社会状況に適応した現在の作物として変化しているのである。

このように、現代南島におけるキビ栽培は、地域社会に息づく伝統を基盤としつつ、現代社会に適応する形で復活したといえる。一方、キビのように栽培の拡大へと至っていないものの、地域によっては現在でもアワやムギ、モロコシなどの伝統的畑作物の栽培が小規模ながらみられる。これらが栽培される背景には、地域社会に根付く伝統があることが指摘される。それは、栽培者の作物に対する個人的な嗜好や思い入れであり、また農耕儀礼における必要性であったりする。そして、これらの作物栽培においては、現在の作物へと変化したキビとはまた異なる意味合いをもつようである。すなわち、これら作物は、どちらかというときキビのような換金作物的な性格は薄く、地域社会の伝統というものに、より根ざした形で栽培されている感がある。それゆえ、そこには、南島地域社会とそれら作物とのより密接な伝統的關係が横たわっていると考えられるのである。そして、その点を明らかにすることは、現代南島における伝統的作物栽培の意味を理解する上で重要であると考えられる。

そこで、本稿では、地域社会の伝統と密接な関係をもちつつ、農耕儀礼にともなっていない栽培される作物の事例を取りあげる。具体的には、竹富島で種子取祭にともない栽培されているアワを考察対象とする。その理由としては、まず、竹富島では南島の中でも比較的まとまったかたちで現在もアワが栽培されていることがある。そして、竹富島の種子取祭は島ぐるみで行われる最大の祭りであり、地域社会において重要な位置を占める。それゆえ、アワ栽培を通して地域社会の諸問題を考察できるのではないかと考えるからでもある。

以下、竹富島のアワの栽培状況を報告し、アワと種子取祭との関係、そして地域社会とアワ栽培との関係を明らかにし、現代南島社会における伝統的畑作物栽培の一側面に迫ってみたい。

Ⅱ. 調査地の概況

竹富島は、沖縄本島から南西約400kmの八重山諸島にあり、八重山の中心島である石垣島からは南西へ約6kmの位置にある。島は周囲約9.2km、面積約5.4km²で、最高所が標高約21mの隆起珊瑚礁からなる低平な島である。2000年12月末の人口（住民基本台帳）279人、世帯数139戸、65歳以上の人口が92人で約33%を占め、高齢化が進んでいる。

竹富島は、行政区としては竹富町に属する。かつて村制時代には1938年まで役場が竹富島に置かれていたこともあるが、現在、町役場は石垣島にあり、竹富町を構成する他の島と同様、島民生活における石垣島とのつながりは強い。特に竹富島の場合、高速船で石垣島から10分程度の距離にあることから、日常的にも頻繁な往来があり、石垣島・竹富島間を通勤する人もいる。

島には、その中央部に東・西・仲筋の3集落があるが、東と西については、あわせて玻座間村とも呼ばれる。そして、祭祀や催事、また島の人の語りなどにおいては、玻座間という村の枠組みが強く生きており、竹富島の村として玻座間と仲筋が対となって現われることが多い。

さて、2000年国勢調査から島の産業分類別就業人口をみると、就業者総数142人中、農業3人、漁業14人と第1次産業の従事者はたいへん少なく、上位は、サービス業71人、卸売・小売業・飲食業22人、運輸・通信業21人と第3次産業の従事者が全体の約81%を占めている。これには、竹富島の経済が多分に観光に頼ったものであることが背景にある。竹富島へは2000年度で約26万人の観光客が訪れたというのが〔日本離島センター 2003〕、この観光を支えているのが、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている集落を中心とする島の景観である。多くの観光客は、沖縄をもっともイメージさせる赤瓦の集落景観に惹かれて島を訪れる²⁾。しかし、観光客のほとんどは、石垣島からの日帰りであ

2) 竹富島の景観や伝統を観光との関係という視点から論じたものに、福田〔1996〕、森田〔1997〕、藤岡〔2001〕などの研究がある。

り、特にパックスツアーで訪れる観光客は、観光バスに乗って島を回り、ほんの数時間の滞在で島を後にする。このことから、観光客の数の割に島にとっての経済的受益は少ないといった問題も指摘されている [小川 1999: 45]。

さて、農業についてであるが、就業者数からもわかるように、また2000年農業センサスをみても農家数7戸と、現在は衰退してしまった状況にある。そして、その内容も、農作物の栽培ではなく、肉用牛を中心とする畜産によるものとなっている³⁾。

しかし、かつての竹富島においては農業が主要な生計手段であった。隆起珊瑚礁の島で水の確保が困難であり、石が多く土壌が浅い土地条件の中で、そこに畑を拓き、第二次世界大戦前においては、サツマイモやアワ、ムギ（コムギ・オオムギ）などが栽培されていた。植松 [1977: 53-55] によると、八重山においてアワは、近世から20世紀初頭に至るまで島民を苦しめた人頭税の貢納対象物であるとともに、食料としても重要な作物であり、その比重は大きかったという。また、人頭税の影響もあって、竹富島をはじめとする隆起珊瑚礁の島（新城島・鳩間島）からは、イネを作るために水田のある西表島まで出作りが行われたことはよく知られている [浮田 1974]。しかし、島の人々の日常の糧はサツマイモであり、そこにアワやムギが補完食として組み合わせられ、西表島で作っていたコメを食べる機会は少なかったという。なお、明治以降は、換金作物であるサトウキビの栽培も行われ、八重山の島々にあって、竹富島はサトウキビの栽培が比較的盛んであったという [入嵩西 1993: 246-249]。

そして戦後になると、引揚者の増大によって人口が2千人以上に膨れ上がり、その食料確保のためにも島の大部分が耕作地として利用され、島中央の集落から海に至るまでの範囲が畑になったという。しかし1956年以降、島の人口は流出していき、それとともに農家数も減少し、農業も衰退していった（表2）⁴⁾。

3) 2000年農業センサスによると、販売農家5戸のうち、1戸は農産物の販売はなく、4戸は肉用牛が農産物販売部門の1位となっている。

4) 玉村 [1974] では、1960年頃から本土復帰（1972年）前後にかけての竹富島の動態が詳しくまとめられている。

表2 竹富島の人口・世帯・農家数

	人 口	世 帯	農 家 数
1955年	1,158	217	—
1960	843	195	—
1965 (64)	513	145	(118)
1970 (71)	373	126	(80)
1975	342	122	50
1980	336	147	37
1985	307	145	36
1990	272	136	10
1995	258	134	5
2000	279	139	7

注) 1960~2000年の人口・世帯は住民基本台帳(各年12月末)により、1955年分は玉村[1974]掲載表の上勢頭氏調査数による。また農家数は農業センサスによるが、1965・1970年については、1964・1971年の戸数となる。

琉球大学民俗研究クラブ[1965]による竹富島の調査報告をみると、1963年で島の世帯数146戸のうち農家数は112戸あり、農業が主産業であった。しかし、すでに島の農業は年々衰退しつつあったという。その要因として、雨量が少なく、耕土が浅く、岩が多いという島の自然条件と、若者の島離れをあげている。その他、西塘会誌⁵⁾という冊子からの引用として、竹富島の産業振興上の短所として、竹富町の農業生産資金の乏しさ、換金作物の少ないこと、消費地の遠隔と交通の便の悪さによる生産物の商品化度の低さ、干害・風害により農業生産の不安定なこと、狭小で分散的な耕作地による労働生産性の低さ、農業施設の未整備などといった点をあげている。

そして、当時栽培されていた作物として、サトウキビ、ラッカセイ、タマネギ、アワ、ダイズ、サツマイモ、コムギ、アズキ、ダイコン、トウガン、ネギ、カボチャ、イネなどがあげられている。その中で、ラッカセイとタマネギが調査時の5、6年前から換金作物として栽培し始められていたが、サトウキビ栽培の隆盛が著しく、農家収入の大半を占めていた。そして、アワやムギの栽培

5) 石垣竹富郷友会がかつて発行した会誌であるという。

はサトウキビ作に変わり、アワなどは祭祀用として面影を残すのみとなり、当時すでにその栽培は少なくなっていたという。

その後、サトウキビ栽培は運搬面などの不便さから1968年以降製糖用としての栽培は行われなくなり [入嵩西 1993: 249]、このほかの作物についても換金作物として根付くことはなかった。そして、西表島で行われていたコメ作りも1970年代初めには行われなくなり、農業はさらに衰退し、島に広がっていた畑は荒れ果て、今日みるように、牛の放牧場を除けば、島の大部分がギンネムなどの樹木に覆われ、集落内の空屋敷の跡地や集落周辺の一部で、自家用の野菜などがわずかに栽培される程度となってしまっている。

Ⅲ. アワ栽培の状況

先に、竹富島は、南島においては比較的まとまってアワが栽培されている地域であると述べた。しかし、現在では、アワを栽培している人はそれほど多くなく、2001年に筆者が確認した限りでは、7名が栽培を行っていた。かつて、アワは主要な作物として多くの農家によって栽培されていたが、先述のように、人口の流出、そして農家数の減少によって、島の農業自体が衰退する中で、アワを栽培する人も減ってきた。しかし、1977年に種子取祭が国の重要無形民俗文化財に指定されたのを契機として、祭に欠かせないアワを作らなければという気運が高まり、一時アワを栽培する人が増えたという。しかし、その後、栽培者の高齢化などもあって、再びアワを栽培する人が減っていき、今日に至っているという。

現在栽培されているアワは、シロモチアワ（シュムチアー）というモチ性のアワである。かつて竹富島で栽培されていたアワには、ヤーター、ヤスパー、ユノムチアー、ホーアーなどの多くの品種があったが⁶⁾、現在は、シロモチアワだけが栽培されている。そして、アワは主に集落内の屋敷地跡を転用した畑で作られているが、集落周辺の畑で栽培する人もいる。また、広く作る人では300坪程度作付けしている。

現在のアワの作期をみると、播種はおおむね12月下旬から1月中旬に行われ、6月末から7月初旬に収穫される。ここで、3名の栽培者を例にその栽培の手順をみておく。

まず、Aさん（男性：1920年代後半生まれ）の場合、基肥として鶏糞を入れた畑に、バラ播きにより播種を行う。そして、芽が出てくると、芽の密なところは間引きをして、また空いたところには移植を行う。その後、2、3回除草をするが、追肥はしない。そして、収穫は、普通のカマで穂の部分を刈り取っていく。収穫したアワの穂は、天日で4、5日乾燥させ、その後、ピンでたたいて脱粒し、種子取祭前に精米機で精白するという。精米機は、Aさんが1990年代中頃に購入したもので、他の人のアワの精白も請け負っている。それ以前には、アワを石垣島まで持って行き、精米機を持っている知り合いのところで精白する人もいたという。

次に、Bさん（男性：1920年代後半生まれ）の場合は、畑がやせているようなら、鶏糞を入れて畑作りを行う。その後、播種はバラ播きするが、平均して播けるように、Bさんは、畑を1間半くらいずつの幅に区切り、それを目印にして播いていくという。播種後は耕耘機で覆土し、その後、間引き・除草を2回ほどするが、追肥はしない。収穫は、熟した穂を選びつつ、普通のカマで穂刈りしていく。そして、最後の収穫が済んでから、穂を2週間くらい乾燥させた後、木製ハンマーでたたいて脱粒し、それを再び2日間乾燥し、ビニール袋を二重にして保管し、種子取祭前に、Aさんの精米機で精白するという。

また、Cさん（女性：1920年代後半生まれ）の場合は、畑に基肥は入れずに播種を行うが、収穫までに3、4回草取りを行い、2回目の草取りの時に、具合をみて肥料を入れるという。そして、収穫には専用の穂刈カマで穂刈りし、穂を一掴みずつ束にして、それを1日天日に干し、その後、束ごとにウス・キ

6) ユノンムチアーはモチ性、ヤーター、ヤスパー、ホーアーはウルチ性であったという。また竹井 [1989] によると、かつて竹富島には他に多くのアワの品種があったことがわかる。

ネで脱粒し、脱粒したものを再び乾燥させ、それをAさん所有の精米機で精白するという。

このように、現在では、栽培者によって施肥や使用具などに若干の差異がみられるが、かつてのアワ栽培では、収穫作業に専用の穂刈カマが用いられることが多く、脱穀に石ウスや木製のスリウスが用いられ、ウス・キネで精白された。また、播種は苗床として決めたところに行い、それを移植することも行われたといい、今日の栽培方法は、農業を取りまく環境の変化の中で、かつてのものとは異なってしまった点も多いようである。

さて、収穫されたアワのほとんどは種子取祭まで保管され、祭の時に作られるイーヤチと呼ばれるものの材料となる。そして、アワを栽培していない人は、イーヤチを作るためにアワを作っている人から購入する。しかし、現在、アワの栽培者は少なく、自ずとアワは品薄ということもあって、2001年時点においては、精白したアワ1升で2500円というやや高値で売買されていた。ちなみに、島の人の多くがアワを栽培していた時代には、それを売買することはなかったという。

アワを栽培している人に栽培をする理由を尋ねると、すべての人が、基本的に種子取祭にアワが必要なので作っているという。さらに、もう一つの理由として、アワが品薄で売れるということあげる人もいる。しかし、先述のように、高齢化もあって、アワ栽培をやめていく人は多い。最近になってアワの栽培をやめた人の話では、年寄りにとって、暑い時期のアワの収穫作業は大変であり、その乾燥などの作業も大変で栽培をやめたという。また、現在栽培している人の中にも、栽培の手間を考えると、1升2500円の値が付いても、アワは割の良い作物とはいえないという人もいる。

そうした中、長年東京に住み、定年後、2000年に竹富島へとUターンしたDさん（男性：1920年代後半生まれ）は、アワの栽培を始めた。その動機は何となく始めたということであるが、Dさんの奥さんの家筋は、ホンジャー（翁・長者）という種子取祭の芸能で重要な役を担う家筋であり、ホンジャーはアワ穂を杖につけて芸能に登場するというので、Dさんは自らが作ったアワの中

でも良いものをそのために取っておいたという。Dさんがアワ栽培を始めたという背景には、ホンジャラーの家筋と関係があるということが少なからずあったようにも思われる。

また、竹富島出身で現在石垣島に住むEさん（男性：1930年代後半生まれ）は、石垣島においてではあるが、1996年からアワやコムギなどの栽培を始め、それを種子取祭の奉納芸能に提供し、またイーヤチの材料として販売している。Eさんがその栽培を始めたきっかけは、1996年、石垣竹富郷友会の発足50周年にあたり、ふるさと祭という催しが計画された。その一つの企画で、アワでイーヤチを作り、コムギで昔ながらの天ぶらを作ったのであるが、当時、会長をしていたEさんは、祭の後、自分自身でもそれらを栽培してみたいと思い、種子を手に入れ、栽培を始めたという。そして、そうした思いを抱いた背景としては、Eさん自身、長年高校の教員として、郷土芸能クラブの顧問となり、退職後も非常勤で郷土音楽の授業をもち、その中で芸能とアワやムギなどの五穀との関係を説明することもあり、そうした点で自分自身でこれらを栽培する必要があると感じ始めたという。

このように、竹富島では種子取祭にもなってアワの栽培が行われているが、栽培者の高齢化もあって、現在栽培する人はたいへん少なくなっている。しかし、そうした中であって、最近になってアワ栽培を始める人もおり⁷⁾、竹富島のアワ栽培は、まったく一方的な衰退の方向にあるとはいえない状況もみられる。

7) Aさんも25年間ほど島外で暮らし、1980年代後半に島に戻ってきてからアワ栽培を始めた。またBさんも一時別の仕事に就いており（島内で）、親の畑仕事を手伝うことはあったが、再び本格的に農業に専念し始めたのは、定年後の1985年以降であるという。

IV. 種子取祭とアワ

1. 種子取祭概略

南島の農耕儀礼をみると、その基本構成は播種儀礼・初穂儀礼・収穫儀礼からなり、日本本土においてみられる田植え儀礼に類するものはほとんどみられない [伊藤 1974]。ここで取りあげる種子取祭は播種儀礼にあたる。種子取祭のもともとの意味は、イネやアワなどの穀物を穂のついたまま積み上げて貯蔵している稲叢（シラ）から、種粃として良いものを選んで取るという所作にあるというのが、基本的には作物の種子を播き、その豊作を祈願するというものである。そして、地域によってそれに芸能や競馬などの行事をとまなうなど、地域性をみせて展開している [伊藤 1974: 71-88; 宮城 1972: 569-572]。

竹富島は、先述したように島内では畑作しか行えず、竹富島の種子取祭は、畑作物の中でも重要な位置づけにあったアワを主体とするものとなっている。祭は、旧暦9月か10月の甲申きのえとらの日から10日間にわたって行われる。竹富島では、数多くの祭祀や儀礼が毎月のように各家や島の行事として行われるが、種子取祭はその中でも最大の祭である。それは10日間にもおよぶ祭期間中に様々な祭事がとり行われ、その間、まさに島民総出の様相をもって、多くの人たちが公民館を中心にその準備や祭事に何らかの形で関わっていく。特に、奉納芸能においては島の人達の多くがそれに取り組み、またそれを楽しむ。さらに、祭には島外から多くの親戚や知り合いが島に戻って来て、また芸能を目当てにたいへん多くの観光客も来島し、奉納芸能の日は島の人口は一気に膨れ上がる。それゆえ、種子取祭を語る島の人々の口調は熱く、種子取祭が竹富島にとって最も重要な行事であることは間違いない。

さて、種子取祭の日程（表3）をみると、祭は第1日目（甲申の日）のトゥルッキに始まり、奉納芸能の練習などが開始される。そして、第5日目（戊子の日）にアワなどの作物の種子を播く、種子下ろし儀礼が行われ、その日にイーヤチが各家で作られる。第6日目（己丑つちのとうしの日）にはイーヤチカミという儀式が行われ、翌第7日目（庚寅かのえとらの日）と第8日目（辛卯かのとうの日）に芸能が奉納

され、種子取祭は最高潮に盛り上がる。また第7日目の夜から第8日目の早朝にかけては、ユークイ（世乞い）といって、神司をはじめとする島の人たちが東・西・仲筋の3集落に分かれて希望する家へ訪問し、唄や踊りを行って、それによってユー（豊穰・幸福）を乞う行事がとり行われる。そして、第9日目以降は、祭の決算報告などが行われ、種子取祭は終了する。

表3 種子取祭日程

	行 事 内 容
第1日目（甲申）	トゥルッキ（祭の役割、奉納芸能の配役を決める）・奉納芸能の練習開始
第2日目（乙酉）	奉納芸能の練習・祭の供物や料理の準備
第3日目（丙戌）	奉納芸能の練習・祭の供物や料理の準備
第4日目（丁亥）	奉納芸能の練習・祭の供物や料理の準備
第5日目（戊子）	種子下ろし儀礼・神司による御嶽での祈願始まる・イーヤチを作る
第6日目（己丑）	ンガソージ（身を慎む日）・イーヤチカミ・奉納芸能の仕組み（リハーサル）
第7日目（庚寅）	バンビルヌニガイ（種子の発芽を願う日）・奉納芸能1日目・世乞い
第8日目（辛卯）	ムイムヌニガイ（発芽後の成長を願う日）・奉納芸能2日目
第9日目（壬辰）	祭の収支決算報告・弥勒奉安殿での祈願
第10日目（癸巳）	タナドゥイムスン（作物に害虫がつかぬよう願う）・浜下りー現在行われず

注) 狩保 [1999] をもとに作成する。狩保は祭の第11日目として願恩いの日（安息日）を上げているが、一般的に種子取祭の期間としては10日間と考えられる場合が多く、ここでは10日間の日程として上げた。なお、島の人には、収支決算報告が済んだ時点で祭は終わると考える人もおり、祭の期間についてはやや遊動的なところがある。

このように、竹富島の種子取祭では、様々な祭事がとり行われ、それぞれの祭事には農耕に関わる内容を含んでいた。以下では、特に本稿の主題となるアワと関連深い種子下ろし儀礼、イーヤチ、奉納芸能について述べていきたいが、先に収穫されたアワのほとんどがイーヤチの材料となると述べたように、イーヤチについては本稿での重要なポイントとなることから、これは章を改めて述べることにする。

2. 種子下ろし儀礼

1921年から1946年にかけて種子取祭を調査した喜舎場 [1977: 463] によると、種子下ろしの儀礼は、主に戸主がアワ（シロモチアワとヤスパー）・ムギ・キビ・モロコシの5種類の種子をもって畑に行き、直径2尺位の円形にヘラで耕し、そこに種子を播き下ろす。その後、種子下ろしをしたことを人に知らせる

のと、五穀の豊穰を願う意味で、ススキの葉の先端を結んだフキ⁸⁾というものを畑に立てて行われるという。そして、種子取祭が播種儀礼であることを考えた場合、この種子下ろしの儀礼にこそ、種子取祭の本義があるといえる。それは、島の種子取祭についての伝承からもうかがえる。

伝承は、かつて竹富島には6つの村があり、各村にはそれぞれ神がいた。そして、神の間ではアワの播種儀礼の日取りをめぐる相違があり、対立があった。その中で、玻座間村の根原金殿という神が、自分が行っている戊子の日に統一をはかろうとして、最大の対立者である幸本村の幸本節瓦に自分の妹を嫁がせ、その説得に当たらせ、また実際に戊子の日の播種分の収穫の良かったことなどから、幸本節瓦や他の神たちも、ついに戊子の日に種子取祭を行うようになったという⁹⁾ [喜舎場 1977: 459-460; 狩俣 1999: 142-144]。この伝承をみると、播種の日取りが重要であり、種子下ろし儀礼こそが種子取祭の主体であることがうかがえる。

ところが、現在、この儀礼はほとんど行われてはいない。筆者が確認したところでは、2000年においてはFさん（男性：1930年代前半生まれ）1人がこれを行うのみであった。Fさんはホンジャーの血筋であり、このこともあって種子下ろし儀礼を行っているという。また、2001年には前年からアワの栽培を始めたDさんも行ったというが、種子下ろし儀礼自体は消滅の危機にあるものといえる。そして、この儀礼の衰退は、かなり早い時期から始まったようである。その正確な時期ははっきりしないが、現在アワを栽培している人や最近まで作っていた人に聞いたところでも、種子下ろし儀礼は、戦後すぐとか20～30年前にはやらなくなったという。これには、農業の衰退によって、アワを栽培する

8) フキは魔除けの意味もある [狩俣 1999: 209-210]。

9) 喜舎場 [1977] によると、第6日目（己丑の日）にも種子下ろし儀礼が行われたとあり、狩俣によると、明治末頃まで幸本御嶽の氏子は、幸本節瓦の定めた己丑の日を大事にして、この日にも種子取祭をしていたという。そして、Fさんの話では、仲筋村では1950年代頃まで幸本御嶽の神にお願いするということで、己丑の日にも種子下ろし儀礼を行っていたといい、Fさんは現在でも戊子と己丑の両日に種子下ろし儀礼をするという。

人自体が減ったことにも要因があると思われるが、その明確な理由は判然としない。現在アワを栽培している人に尋ねても、そうしたことはもうしないというだけの答えが返ってきて、それほどはっきりとした理由はなく、単に面倒だからしないというようなニュアンスが感じられる。

このように、種子下ろし儀礼は風前の灯火であるといえるが、ここで、筆者が2000年11月26日（戊子の日）に観察したFさんの種子下ろし儀礼の様子を述べておく。

Fさんは、朝9時すぎに、アワの種子を入れたカゴとヘラ、カマ、そしてススキをもって自宅から畑に向かった。畑につくと、すでに約2メートル四方に区画し、耕していた部分をヘラでさっとならす。その後、畑に向かって拝み、そして播種を行って、ヘラで覆土をしてから、ススキの葉を結んだフキを3本畑に立てて、最後に再び拝んで儀礼は終わった。

このように、Fさんの場合、アワだけを播種し、畑を方形に耕したりと、喜舎場 [1977] が記した内容とは若干異なる点もみられた。これについては、時間の経過による変化ということも考えられるが、種子下ろし儀礼は各家で行われるものであったことから、各家においては細かな点で差異もあったようである¹⁰⁾。

3. 奉納芸能

竹富島の種子取祭が国の重要無形民俗文化財に指定されるに至ったのは、そこで奉納される伝統的な芸能の存在によるところが大きい [文化庁文化財保護部 1977]。しかし、奉納芸能はもともと当初から種子取祭で行われていたものではなかったという。

八重山では豊年祭や節祭など、島や集落によって芸能が奉納される祭に差異がある。狩俣 [1999: 131-132; 184-188] によると、これは、琉球王府時代に八

10) Bさんによると、種子下ろし儀礼のために耕す範囲は円形や方形と各家で様々であったという。また、Bさんがかつて種子下ろし儀礼をしていた時は、アワと一緒にムギを播いたという。

重山を支配した士族の意図によるもので、士族が各島を巡視の際に、芸能を観覧できるようにと、芸能がとり行われる祭を島・集落によって異なるようにさせたという。また、士族との関係によって、八重山の奉納芸能は、首里における芸能の要素を取り入れることができ、洗練されていったのだともいう。

これによると、竹富島の種子取祭における奉納芸能も、近世のある時期に種子取祭に付加したことになる。しかし、そこには、アワ栽培をはじめとする農耕にまつわる所作や願いを盛り込んだ狂言や舞踊などが多く演じられており、奉納芸能が農耕儀礼である種子取祭において重要な意味をもつことは間違いない。

種子取祭での芸能は、現在、世持御嶽という御嶽の前で行われるが、芸能が奉納される場として、御嶽のすぐ前面に設置された舞台と舞台前の広場とがある。そして舞台で演じられる芸能を「舞台の芸能」、広場での芸能を「庭の芸能」といい、奉納芸能1日目・2日目とも庭の芸能が奉納された後、舞台の芸能が奉納される。そして、奉納芸能は、玻座間と仲筋の各村それぞれに決まった演目があり、現在、舞台の芸能は、1日目は玻座間村、2日目は仲筋村が中心となって奉納されることになっている。

現在奉納される芸能は2日間で約60演目にもなるが、その中でもっとも重要視されるのが、「ホンジャー」、「弥勒（ミルク）」、および例狂言（ジーキョングン）とよばれる狂言である。これらは、何があっても必ず奉納されなくてはいけないという。「ホンジャー」と「弥勒」はそれぞれ演じる家筋が決まっており、例狂言は、玻座間村が4演目、仲筋村が3演目奉納することになっている。

そして、これらの内容であるが、狩俣 [1999: 132-133; 172-195] の記述をもとにみると、「ホンジャー」は、種子取祭の儀礼的統括者であるホンジャーが、名乗りと豊作の祈願をした後に、村の役人に対して奉納芸能の許可を願い出て、その開始を宣言するものである。そして、「ホンジャー」は、玻座間村のホンジャーが1日目に、仲筋村のホンジャーが2日目に舞台の芸能の最初に演じる。この「ホンジャー」の次に奉納されるのが「弥勒」であり、2日間同じ内容と

演者で行われる。ここで現われる弥勒神は、八重山各地の祭においても登場するが、これは、士族によって八重山にもたらされた近來の神であるといい、繁栄をもたらすものとされる。そして、その後、様々な舞踊や狂言などをはさみながら、例狂言が演じられる。玻座間村の例狂言については、農具を製作する「鍛冶工（カザグ）狂言」、荒れ地を開墾する「組頭（フンガシャ）狂言」、種子播きの「世持（ユームチ）狂言」、作物の収穫を祝う「世曳（ユーヒキ）狂言」の4番で、1年間の農耕の過程が演じられる。一方、仲筋村の例狂言は、種子取祭の参加を呼びかける「シドゥリヤニ」、天人から作物の種子を拝受する「天人（アマンチ）狂言」、種子播きの「種子蒔（タニマイ）狂言」の3番で、その内容は播種と種子取祭をテーマにしたものであるという。

このように、種子取祭に欠かせないといわれるこれらの芸能、特に例狂言をみると、それは、まさにアワをはじめとする作物の豊作を願う種子取祭に相応しい内容をもつものといえる。そして、これらの芸能においては、実際のアワ穂やムギ穂などが登場する場面がある¹¹⁾。ここで使用されるアワについては、先にも少しふれたが、アワの栽培者が、その芸能を行う集落や家筋との関係で提供している。奉納芸能にアワを提供することについては、芸能を司る人から頼まれるのでアワを提供しているという人もいるが、ホンジャーという家筋と関係があることからアワ栽培を始めたDさんのように、「ホンジャー」という芸能に対してのある種の思い入れをもって提供している人もいる。また、Fさんは、奉納芸能にアワを提供することによって自分自身にも御利益があるという。

八重山各地の祭では、奉納される芸能においては竹富島の種子取祭と同様にアワ穂などが登場するが、実際にはその地において栽培されておらず、他所から入手される場合が多い。そして、今日では、地域社会とその作物との間に実質的な繋がりがみられないという状況がほとんどである。この点からいうと、竹富島の種子取祭の芸能において登場するアワは、実際に祭にたずさわる人た

11) 「ホンジャー」・「弥勒」・「世曳」・「天人」ではアワ穂が登場し、「世持」・「種子蒔」ではアワの種子がカゴに入れられて登場する。

ちによって栽培されているのであって、少なくとも生きた奉納物であるといえるであろう。

V. イーヤチ

イーヤチは、モチアワとモチゴメ、そしてアズキを材料に作られるモチのような食品である。現在、竹富島でアワが栽培されているのは、種子取祭でイーヤチを作るためだという。今日、島のどれくらいの世帯でイーヤチを作るか正確な数はわからないが、毎年安定した栽培を行っているA・B・C3名の栽培者のところへは、例年あわせて50～60名ほどの人がイーヤチ用にアワを購入に来るといふ。この中には、複数の栽培者からアワを購入する人もいるかもしれないので、この数が即イーヤチを作る世帯数とはならないが、おおよその目安となるであろう。

さて、イーヤチは、「飯初（イイハツ）」という言葉が変化したものであるといわれており¹²⁾ [喜舎場 1977: 464; 竹原 1980]、八重山各地の種子取祭で作られる。竹富島以外の地域でみられるイーヤチについては、モチもしくはウルチのコメを円錐形のおにぎり状にまとめたもので、食紅で色づけるなどして紅白のものが作られたりする。これに対して、竹富島のイーヤチは、先述の材料をもって板状の形に作られ、八重山の中にあっては独特のものとなっている。

その作り方は、現在では多くの場合、炊飯器でコメ・アワ・アズキを炊き、それを練ってプラスチック製の弁当パックに詰めるだけである。しかし、かつては1斗炊きほどの大鍋を用いて薪で炊き、イーヤチダーという板の上で形を整えて作られた。そして、今日でも昔ながらのやり方でイーヤチを作る家もみられる。

12) イーヤチは、他の島ではイバッチィ・イバチなどともよばれる。またイーヤチの語源については、その形が歪であるという「イビツ」にあるという説もある [宮良 1980]。

2000年に筆者が見学したBさんの家のイーヤチ作りでは、コメ7升、アワ1升、茹でアズキ4合を大鍋で炊いて、炊きあがったものをイビラという大きなヘラを使って、3人でかき回すように練り込み、それを7升用のイーヤチダーの中に詰め込んでいき、イーヤチダーに入らなかった分は弁当パックに詰めて、イーヤチが作られた。

イーヤチの材料であるコメ・アワ・アズキの量や割合は、各家によって異なるが、アズキは赤い彩りとなる程度に入れられ、割合的にはそれ程多くない。主体となるコメとアワについては、Bさんの家では、コメ10に対してアワ約1.4の割合でもって作られていたが、他の家でもコメ10に対してアワ1~1.5という割合で作るといふところが多かった。また、昔は今よりもアワを多く入れてイーヤチを作ったという。

種子取祭の日程では、イーヤチは第5日目の夕方に作られるが、その日は種子下ろし儀礼を行う日でもある。かつては、種子下ろし儀礼を行った人のためのマンジュウ形のイーヤチも別に作られたという。そして、これをタニヌイーヤチ（またはタニウラシイーヤチ）といい、イーヤチダーで作ったものをダーヌイーヤチという。先述したように、今日では種子下ろし儀礼がほとんど行われていない状況なので、タニヌイーヤチが作られることもほとんどないが、現在も種子下ろし儀礼をするFさんの家では、種子下ろしをしたFさんのためにタニヌイーヤチを作るという。また、喜舎場 [1977: 464] によると、イーヤチを作った後、ダーヌイーヤチは、家の一番座とよばれる部屋にある座床の神前に供えられ、タニヌイーヤチは、二番座とよばれる部屋にヘラやカマなどの農具に感謝して飾られたという¹³⁾。

さて、このようにして作られたイーヤチであるが、かつては、その翌日に各家出自の姉妹・叔母など女性を招いてイーヤチをご馳走するイーヤチカミ（飯

13) 筆者の聞き取りの範囲では、タニヌイーヤチを二番座に供えたという話を聞くことはできなかった。Fさんもタニヌイーヤチは二番座でなく、一番座に供えているという。なお、今日でも作られたイーヤチは一番座の座床の神前に供えられる。

初戴)という儀式が広く行われた。

イーヤチカミでは、招かれた女性のうち、戸主(男性)の姉妹か叔母に当たる年長の女性が、最初にダーヌイーヤチに包丁を入れ、3寸×5寸程度の大きさに切るが、その切り分けていく箇所と順番に決まりがあり、年長の女性に差し出されるイーヤチの箇所にも決まりがある。そして、切り分けられたイーヤチは、魚や蛤などの汁物とニンニク漬けとともに招待客にもてなされる〔喜舎場 1977: 466; 亀井 1990: 203-204〕。

イーヤチカミについては、18世紀に成立した西表島の習俗・伝承などをまとめた慶来慶田城由来記に、西表島の種子取祭で、コメでイーヤチを作り、村の役職者や女性を招いて、イーヤチなどのご馳走をもって会食したという記述がある〔狩俣 1999: 120-125〕。これが、竹富島のイーヤチカミのように儀式として整ったものなのかどうかはわからないが、少なくとも由来記がまとめられた頃には、種子取祭にイーヤチをもって会食するという風習が西表島にあったことがわかる。

ここで、もう少しイーヤチカミについてみると、イーヤチカミでは戸主の姉妹・叔母など女性が儀式的中心となる。馬淵〔1974: 123-145〕は、この点に注目し、オナリ神信仰との関連を指摘している¹⁴⁾。オナリ神信仰とは、広く沖縄にみられるもので、男兄弟に対して女姉妹は霊的に優越しており、姉妹が兄弟を霊的力により守護してくれるという信仰である。馬淵〔1974〕によると、八重山各地の種子取祭においてはオナリ神信仰に関わる内容が認められるとして、竹富島のイーヤチカミで戸主の姉妹・叔母がダーヌイーヤチに最初に包丁を入れることや、石垣島新川でイーヤチを必ず最初に姉妹や叔母に届けるしきりがあったことなどをあげている。そして、確かに竹富島での聞き取りでも、イーヤチカミにはオナリ神を大切にするという意味もあるというような内容を語ってくれる人も多い。

14) 伊藤〔1962〕も八重山の播種儀礼に、兄弟姉妹の呪術宗教的関係が認められることを指摘している。

このように、イーヤチをめぐるのはオナリ神信仰との関係が認められる。そして、竹富島の種子取祭においては、オナリ神信仰というベースの上に、女性を家に招待し、ダーヌイーヤチを切り、それをご馳走するという整った形でイーヤチカミが儀式として成立したのであって、このことが、祭の中でのイーヤチの重要性をより高めたのだといえよう。

しかしながら、現在ではかつてのような厳格な形でイーヤチカミが行われることはほとんどない。また、イーヤチを作ってもイーヤチカミを行わない場合がほとんどのようである。馬淵が先の論考を著わす機会となった1954年の調査時点においては、すでにその厳格さは崩れ始めていたという [馬淵 1974: 130]。

2000年に筆者が見学したBさんの家のイーヤチカミも簡単に行われた(写真1)。午前中に戸主であるBさんの妹が家に呼ばれて、身内はBさんの奥さん(bさん)とその次男の奥さんがいるだけの中、ダーヌイーヤチに最初に包丁を入れた。そして、その後は、bさんや見学者である筆者らも手伝ってイーヤチを切り分けた。そして、最初に切り分けたイーヤチの一つをBさんの妹が座床



写真1 イーヤチカミ (2000年)

の神に供え、bさんがすまし汁と弁当パックにつめたイーヤチを仏壇に供えた。そして、その後で、仏間である二番座でBさんの妹とbさんがイーヤチとすまし汁、タコ、ニンニク漬けをもって簡単に会食した。

bさんの話では、イーヤチカミは簡略化されるようになり、現在、ダーヌイーヤチを切るという所作は行うが、親戚の女性を招待して、会食するということは行わなくなったという。また、本来、会食は本家筋の女性しかできず、嫁の立場のものは同席できなかったといい、また食事の準備が忙しくその余裕すらなかったという。

このように、今日のイーヤチカミは、それが行われる場合においても簡略化が進み、その厳格さも失われている。そして、その背景には、次のような点があげられる。

イーヤチカミでは親戚の女性を招待してイーヤチが分けられるが、血縁的繋がり強い島の家々にあっては、イーヤチカミに招待されるのは1戸の家からだけとは限らず、複数の家から招待される。また招待する側の女性も別の家から招待されたりもする。そして訪問に際しては祝儀を包むのが慣習であるという。それゆえ、招待する側・招待される側双方の間で結局イーヤチを渡し合う結果になり、また、その準備や費用などに要する負担も大きいということもあり、大々的に女性を招待してイーヤチカミが行われることはほとんどなくなったようである。また、アワの栽培量が減ったこともその要因であるかもしれない。ただし、こうした中において盛大にイーヤチカミが行われることもある。

竹富島の自治は公民館を中心に運営されているが、その長に公民館長があり、その補佐的役職として主事がおかれる。現在3集落から各1名が選出され、館長職（1名）と主事職（2名）を分担することになっているが、主事職については男性が島で暮らす中で2、3回その役職が回ってくるという。そして、近年では初めて主事となった年の種子取祭にはイーヤチカミを行うのが一般的であるという。このイーヤチカミでは多くの女性を招いて大々的に行われ、イーヤチ作りや食事の準備などは、その主事が住む集落の人たちの手伝いをもって行われる。しかし、現在、このイーヤチカミについては、公には簡素化、または

やめようという申し合わせが何度か島の人たちの間で行われているという¹⁵⁾。その理由としては、イーヤチカミにかかる経費は基本的に主事個人の負担となり、また数日にわたる種子取祭においては、主事は役職者としてイーヤチカミだけでなく、他に多くの儀式や仕事がある。このことから、あまり主事に負担が大きくなると、新たに主事になりたがるものがいなくなるのではないかという危惧もあり、イーヤチカミに関する申し合わせがなされているという。しかし、イーヤチカミをするかしないかは主事となった人の意志を尊重するということで、イーヤチカミをすとなれば、集落の人たちが進んで手伝ってくれるという。そして、実際、初めて主事になると、イーヤチカミを行う場合が多いようである。

さて、以上のように、イーヤチカミは、現在一般にはほとんど衰退してしまった状況にある。しかしながらイーヤチは種子取祭に欠かせないものとして現在も作られている。そして、種子取祭においてイーヤチは、例えば芸能が奉納される場面や神司らが御嶽を参拝する時など、島全体もしくは集落という公の場で供物として登場することはない。それはイーヤチカミや座床へのお供えとして、あくまでも家中においてのみ登場する¹⁶⁾。つまり、イーヤチは公的な必要性からではなく、各家(各個人)の意志が主として働き作られているのである。

それでは、現在、イーヤチはどういう意味をもって種子取祭に欠かせないものとして作られているのだろうか。Bさんの家ではイーヤチカミをすますと、すぐに石垣島の親戚へイーヤチをもっていく姿がみられた。祭の日取りでは、イーヤチは第5日目に作られることになっているが、実はその日以外にも数回にわたってイーヤチは作られ、親戚や知人に配られたりする。そして、イーヤチは竹富島や石垣島などの近隣だけでなく、沖縄本島や本土に住む親戚などに

15) 大山 [1991] に掲載の種子取祭の変遷年表をみると、1958年にイーヤチ廃止論が唱え始められるとあり、1963年には主事のイーヤチカミが廃止とある。

16) 第7日目と第8日目の朝には、島の役職者や有志が主事宅を訪問する「参詣」が行われ、その時の食事としてイーヤチも出されるが、これも主事宅でのもてなしであり、公の場での供物ではない。

も送られたりする。Gさん（女性）は、祭の一週間くらい前からイーヤチを試作して、それを石垣島に住む夫の姉妹にもっていくという。イーヤチをもっていくのは、夫の姉妹が最近種子取祭に来られなくなったので、Gさんの気持ちとしてはイーヤチカミの意味もあるという。また、^{かみつかさ}神司のHさん（女性）は、祭の最中は忙しいので、祭が終わった後に多くのイーヤチを作って知人に配るという。また、bさんの話では、祭時分になると親戚の方からイーヤチの催促があつたりもするという。

このように、今日、イーヤチの多くは親戚や知人への贈り物として用いられ、イーヤチは交際用としての性格を有している。イーヤチの交際用としての性格は、イーヤチカミの内容をみても、もともとイーヤチに備わっていた面もある。しかし、今日においてはさらにその側面が強くなっているといえる。

しかしながら、交際用としての必要性だけが、イーヤチを種子取祭に欠かせないものとさせている理由なのだろうか。いや、おそらくイーヤチはその用いられ方だけではなく、島の人にとってそれが祭にあるべきものであるという、意識面での作用が強く働いているようである。

亀井 [1990: 204-205] によると、かつてイーヤチは戦後の食料不足の中にあつて、廃止の方向にあつたという。しかし、社会秩序の回復とともに、島の人の中から種子取祭のシンボルであるイーヤチを復活させたいという声があがり、近年イーヤチを作る世帯が増え、主に交際用に用いられているという。筆者の聞き取りでは、島でイーヤチがまったく途絶えたということはないようであるが、イーヤチのあり方について島内で議論されたり、イーヤチを作る家がかなり減少したことは事実のようである。そして、亀井の記述で注目したいのが、イーヤチが種子取祭のシンボルとされている点である。おそらく、このシンボルという表現は、イーヤチが種子取祭に欠かせないものであるということを説明するにあたっての的を射たものといえよう。

かつて、種子取祭では、奉納芸能の日を前後する日の食事はほとんどイーヤチで済まされていたという。50歳代であるIさん（男性：1950年代前半生まれ）の子供の頃の思い出として、奉納芸能の日は忙しく、親は食事を準備する暇も

なく、祭の食事は日持ちのするイーヤチばかりで終いには飽きてしまったが、普段サツマイモが常食であった時代にあっては、コメとアワから作られるイーヤチが食べられることはうれしいことであったという。また、Hさんは、昔食べるものがない時代に、コメ・アワであるイーヤチを食べられるという意味とともに、祭を大切にしたいと盛大にすることによって、神への感謝を表わしたという。

このように、イーヤチは、イーヤチカミでの儀式食というだけでなく、祭時の食べ物としても島の人に意識されているのである。そして、近年の種子取祭においては、もっとも人で賑わう奉納芸能の日に、イーヤチが販売されている。イーヤチの販売は島で食堂などを経営している2、3名が個人的に行っているという。Jさん（男性）は、種子取祭に来る人にイーヤチを食べてもらおうと15年ほど前（2002年時点より）から販売しているという。また、Kさん（男性）は、1996年頃に竹富島文化協会¹⁷⁾の人から正式な形ではないが、種子取祭を目的に島の外からやって来る人たちに祭をさらに感じてもらえるように、イーヤチを販売しないかという話があり、祭の合間をみてイーヤチを作り販売しているという。

このことからわかるように、イーヤチは、島の人々の意識の中で種子取祭と強く結びついているのである。そして、こうした意識の形成には、オナリ神信仰に根ざしたイーヤチカミが儀式として成立し、かつてそれが種子取祭において重要な儀式であったことが背景としてあろう。おそらく、以上のようなことが相俟って、イーヤチは種子取祭においてシンボリックなものとして島の人に意識され、現在は交際用という用途にその実用的意義をもちつつ、種子取祭に欠かせないものとして作られているのであろう。そして、イーヤチを作るために、現在も竹富島でアワが栽培されているのである。

17) 竹富島在住者・出身者らを中心に、竹富島の文化を継承することを目的に設立された団体。

Ⅵ. アワ栽培の位置づけ

以上、種子取祭におけるアワのあり方についてまとめた。その結果、祭の本義的部分といえる種子下ろし儀礼については衰退した状況にあるが、奉納芸能については、現在も種子取祭がアワを中心とする農耕儀礼であることを思い起こさせる例狂言が大切にとり行われ、そこで登場するアワ穂なども実際に島の人が栽培したものが用いられていた。そして、アワを材料とするイーヤチについては、イーヤチカミは衰退したものの、種子取祭のある種シンボリックな位置づけにあり、交際用とその実用的意義を保ち、今日もアワが栽培される最大の理由は、このイーヤチを作ることにあることが明らかとなった。

この種子取祭でのアワのあり方をみると、アワの存在意義は、アワの種子を下ろすという祭本来の根本的儀礼部分にではなく、奉納芸能やイーヤチという、ももとは祭の付随的位置づけにあった部分に移っていることがわかる。しかし、島の農業が衰退し、地域社会における農耕儀礼のバックボーンが崩れ、種子取祭自体がその存在意義を変化させていることを考えると、祭におけるアワの現われ方が変化しても不思議ではない。

神司であるHさんは、島で農業がほとんど行われていない今日の状況にあって、種子取祭に今日的意義を見いだすとするならば、それは島の人たちの健康を祈願することであろうという。また、Iさんも種子取祭は豊作祈願から健康・平穏を願う祭へと変化しているといい、また祭が地域社会をまとめる機会にもなっているという。このような種子取祭に対する見方は、おおよそ島の人たちが抱いている大方のものではないだろうか¹⁸⁾。つまり、農業の衰退や高齢化など様々な地域社会の変化により、種子取祭の存在意義も変化してきているのである。

このように、種子取祭自体のあり方が地域社会において変化している中であって、それでも祭の中にアワの存在意義が見いだされることは、かえって種子

18) 阿佐伊 [1979] も、島の社会生活の変化と種子取祭のあり方について述べている。

取祭とアワとの強固な関係を示すものといえる。

竹富島では、種子取祭のほかにも数多くの農耕儀礼が行われている。その中で、旧6月に行われる豊作を神に感謝する豊年祭（プイ）と、旧11月に行われる来る年の豊作を願う長月願い（ナーキヨイ）では、イーヤチと同じ材料・作り方をもって、掌大のダンゴ状に仕上げられるムチャネとよばれるものが作られる。ムチャネは、イーヤチと比べると作る家も作る量も少ないが、現在、ムチャネを作るにあたっては、種子取祭でイーヤチを作った後に余ったアワを用いることが一般的である。これは、アワが品薄であることにもよるが、豊年祭の時期をみると、それはちょうどその年に作付けされたアワの収穫がなされた直後であり、収穫されたばかりのアワが一番豊富にあるはずなのだが、前年に収穫されたアワが用いられる。さらに、アワが足りなければ、モチキビを購入するなどして代わりに用いられたりもする。例えば、アワを栽培しているBさんやCさんのところでは、種子取祭のイーヤチはアワでなければいけないというこだわりをもって作られているが、2001年の豊年祭ではアワがなかったので、モチキビでムチャネが作られた。つまり、この例からもわかるように、現在栽培されているアワはあくまでも種子取祭のイーヤチと結びついているのであり、ひいては種子取祭がアワの祭であるということを島の人たちが強く意識していることを示すものといえる。

このように、種子取祭でのアワのあり方は、地域社会、そして種子取祭自体の変化の中で、これまでに変化をとげてきた。しかし、そうした変化を経てもアワは種子取祭に欠くことのできないものとして、島の人たちに強く意識されているのである。

それでは、アワが種子取祭とこれだけ強い結びつきを今日まで保ち得たのはどのような要因によるのであろうか。それはいうまでもなく、アワがかつての竹富島の生活の中で重要な作物・食物であり、島で最大の祭である種子取祭の本来の主体であり、祭のシンボリックな位置づけを与えられるに至ったからであろう。そして、アワまたはアワを材料とするイーヤチが、種子取祭には欠かせないものであるという伝統的な島の人たちの思いが根強く存在し続けたこと

にあらう。つまり、こうした思いが根底にあったからこそ、農業が廃れてしまった今日においても、少ないながらアワを栽培する人が途絶えることがなかったのである。また、こうした思いは、DさんやEさんの例でみたように、それまで農業に携わっていなかった人が、定年や島へのUターンを機にアワ栽培を始めるといった、動機づけの原動力にもなっているのであらう。

さて、以上のように、種子取祭との深い絆の中で栽培されているアワであるが、今日の島の実生活におけるそのあり方をみるとどうであらうか。これは、先ほどから述べているように、アワはあくまでも種子取祭と結びついて栽培されているのであり、アワの栽培自体が少なくなっている現在において、アワが島の人たちの実生活に関わることはほとんどない。アワは日常の食卓に上ることもなければ、日常的に売買されることもないのである。Bさんは、もし種子取祭でアワが必要でないのなら、食べて美味しいモチキビをもっと多く作るだろうという¹⁹⁾。

このように、現在の竹富島での実生活においては、アワの存在意義はほとんど失われ、アワは種子取祭との関係においてのみ存在意義を保ち得ているのである。そして、ここで注目すべきは、かつてはアワ栽培をはじめとする農業の存在が、その豊穡を願うという意味での種子取祭の存立基盤であったが、今や種子取祭の存在がアワ栽培を存続させているという、立場の逆転現象が起きているという点である。つまりは、種子取祭におけるアワの位置づけの変化ばかりではなく、種子取祭とアワ栽培との根本的な関係においても変化が生じているのである。

Ⅶ. おわりに

以上、種子取祭を中心に竹富島のアワ栽培についてみてきた。その結果、アワは、種子取祭に欠かせないものとして島の人たちに強く意識され、今日まで

19) 筆者の確認した限りでは、2000年で4名がモチキビを栽培していた。

栽培が続いてきた。しかし、島の実生活においては、アワはもはやその存在意義を有さないものであった。また、種子取祭におけるアワの必要性は、種子下ろし儀礼にはなく、イーヤチや奉納芸能において求められており、さらに、アワ栽培と種子取祭との関係において立場の逆転現象が起きていた。

このように、古来より伝統的に続いているようにみえる竹富島のアワ栽培も、農業の衰退や高齢化などといった地域社会の変化、特に今日のアワ栽培存続の基盤といえる種子取祭自体の変化によって、その内容や意義はこれまでに様々な変化をとげてきたのである。ただし、こうした変化とは関係なく、アワ栽培を常に支えてきたものがある。それは島の人々のアワに対する思いである。これは決してアワ単独に対してではなく、島にとって重要な種子取祭と結びついているものであるが、かつてアワは竹富島において重要な作物・食物であり、種子取祭本来の主体であった。そのアワが種子取祭にとって不可欠のものであるという思いは、おそらく過去から現在に至るまで島の人たちに確実に引き継がれてきたのであろう。そして、この伝統的な思いの継承こそが、今日までアワ栽培を存続たらしめた根本的要因なのである。

さて、はじめにも述べたように、現在、南島各地においては、アワと同じ伝統的畑作穀類のキビが、今日の社会状況に適応する形でその栽培を拡大させている。このキビ栽培と竹富島のアワ栽培とを比較するとどうであろうか。

まず、キビ栽培の場合、その栽培復活の基盤としても地域社会に息づく畑作穀類栽培に対する伝統の存在があった。そして、キビ栽培拡大の背景には、キビがモチ味という嗜好性を有し、少なからず商品作物的性格を帯びたことが、市場経済を基盤とする今日の社会に適応したことにあつた。

ところが、竹富島のアワ栽培をみると、アワ自体品薄でやや高値で売買されているが、それはあくまでも種子取祭に必要なだからということで取り引きされているのであり、一般的な商品作物的性格を有するものではない。また、嗜好性という点についても、今日アワは食品としてのおいしさを求められているのではなく、イーヤチの材料として必要とされ、利用されているのである。

このようにみると、竹富島のアワ栽培は、キビ栽培のように、その栽培を拡

大させるといふ面での現代社会に対する適応性は希薄であるといえる。

さらに、キビの場合、栽培地によって量的な差はあるものの、市場などでの流通を通じて、島の外の世界にも広がりをもつ。これに対して、竹富島のアワは、竹富島という地域社会の中でそのもつ意味がほぼ完結しているのである。Eさんのように、石垣島で栽培したアワが竹富島に提供されたり、またイーヤチが島外の親戚や知り合いに贈られたりもするが、これらはあくまでも竹富島との関係という枠組みの中で成り立っているものであり、アワの意味は竹富島地域社会の中でほぼ完結しているのである。

このように、今日の竹富島のアワ栽培をみる限りでは、アワが、キビのように現在の作物として再びその栽培を外に向けて拡大していくといった可能性はほとんどないように思われる。おそらく、アワは、種子取祭を軸として、島の人たちの思いに支えられて、そしてDさんやEさんのような、栽培を新たにはじめるという形での伝統的思いの継承者の出現などにもより、竹富島という地域社会の枠内で、今しばらくは少ないながらも栽培されていくものと考えられる。

さて以上、竹富島のアワ栽培を中心に、農耕儀礼にともなう伝統的作物栽培のあり方をみてきた。この竹富島の事例だけをもって、南島での農耕儀礼にともなう伝統的作物栽培の今日的状況のすべてを語ることはできないが、大筋で次のようにいえよう。一つは、はじめにも少しふれたが、こうした栽培が、栽培者や地域社会の人々の伝統的作物に対する強い思いによって支えられているという点である。そして、もう一点は、その栽培の意味が、それが栽培されている地域社会においてほぼ完結しており、栽培地の外的空間に対してはほとんど関係をもたないということである。

筆者は、竹富島のほか、石垣島の白保集落と宮良集落において農耕儀礼用にアワ（ウルチ性）を栽培する人からも話を聞いた。白保でアワを栽培するLさん（女性）は、昔の農作物に興味があったことから、15年ほど前（1998年時点より）に宮古の伊良部島の親戚からアワの種子を取り寄せ、豊年祭の神酒用にアワを栽培している。また、宮良のMさん（男性）は、7～8年前（2000年時

点より)にLさんからアワの種子を分けてもらい、結願祭用に栽培している。そして、Mさんの場合、奥さんの叔母が神司であることもあって栽培を続けているという。

このように、ここでもその栽培は、栽培者の作物や儀礼に対する思いによって支えられているのである。そして、これらのアワも儀礼で用いられるのみで、キビのように流通することはなく、集落という空間の中でほぼ完結するものであった。ただし、各栽培者のもとへは、他の集落や島の人からそこでの儀礼に使うのでアワを分けて欲しいとの依頼もあるという。しかし、これについては、儀礼という限られた一時的な場面において用いられるだけであり、一般性をもった外的空間への広がりとはいえない。そして、栽培者はあくまでも自分の集落の農耕儀礼のためにアワを作っているのである。

以上の例からも、農耕儀礼にともなう伝統的作物の栽培が、地域社会と密接な関係にあることがわかる。そして、それを支えているのが、その作物・儀礼に対する栽培者や地域社会の人々の思いなのであり、その思いは、地域社会に受け継がれてきた農耕や儀礼の伝統に根ざしたものなのである。

付 記

本稿をまとめるにあたりましては、竹富島の多くの方々からのご協力を得ました。記して感謝致します。

参 考 文 献

阿佐伊孫良

1979 「竹富島の種子取」を考える」『八重山文化』7: 18-56。

文化庁文化財保護部

1977 「新指定の文化財」『月刊文化財』165: 40。

藤岡和佳

2001 「村落の歴史的環境保全施策—沖縄県竹富島の町並み保存の事例から—」『村落社

会研究』7 (2): 25-36。

福田珠巳

1996「赤瓦は何を語るかー沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動ー」『地理学評論』69A (9): 727-743。

入嵩西正治

1993『八重山糖業史』石垣島製糖株式会社。

伊藤幹治

1962「八重山群島における兄弟姉妹を中心とした親族関係」『民族学研究』27 (1): 7-12。

1974「稲作儀礼の研究ー日琉同祖論の再検討ー」而立書房。

亀井秀一

1990『竹富島の歴史と民俗』角川書店。

賀納章雄

1996「南西諸島におけるアワ栽培の地域性」『史泉』83: 18-38。

1997「先島諸島におけるアワ用農具の形態と地域性」『関西大学博物館紀要』3: 218-240。

1998「南西諸島におけるムギ栽培の様相」関西大学文学部地理学教室（編）『地理学の諸相』大明堂、pp.363-379。

2000「沖縄県渡名喜島・粟国島における伝統的作物キビの復活とその背景」『人文地理』52 (1): 67-83。

2002「現代南島における伝統的作物の復活ー沖縄県石垣島・波照間島のキビ栽培を中心にー」『史泉』96: 21-39。

狩俣恵一

1999『南島歌謡の研究』瑞木書房。

喜舎場永珣

1977『八重山民俗誌 上巻民俗篇』沖縄タイムス社。

馬淵東一

1974「沖縄先島のオナリ神（二）」『馬淵東一著作集第三巻』社会思想社、pp. 123-145。

宮城文

1972『八重山生活誌』沖縄タイムス社。

宮良泰平

1980「イバチの語源について」八重山毎日新聞1980年4月5日付。

森田真也

1997「観光と「伝統文化」の意識化ー沖縄県竹富島の事例からー」『日本民俗学』209: 33-65。

日本離島センター（編）

2003『2002離島統計年報』（財）日本離島センター。

小川護

1999「竹富島・小浜島・黒島の地理的概観」沖縄国際大学南島文化研究所（編）『八重山、竹富町報告書（1）ー地域研究シリーズNo27ー』pp. 1-8。

大山正夫

1991『続・昭和の竹富』自費出版。

琉球大学民俗研究クラブ（編）

1965『竹富島調査報告』『沖縄民俗』7: 27-119。

佐々木高明

1972『沖縄本島における伝統的畑作農耕技術—その特色と原型の探求—』『人類科学』25: 79-107。

1976『南島における畑作農耕技術の伝統』九学会連合沖縄調査委員会（編）『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂、pp. 25-40。

2003『南からの日本文化（上）・（下）』日本放送出版協会。

竹原孫恭

1980『「イバッチィ」考』八重山毎日新聞1980年3月26日・27日付。

竹井恵美子

1989『南西諸島における雑穀の在来品種と食品利用』『大阪学院大学人文自然論叢』20: 87-103。

玉村和彦

1974『竹富島（沖縄）にみる観光地化への軌跡』『同志社商学』25（4）（5）（6）: 565-586。

植松明石

1974『新城島の畑作』『八重山文化』2: 36-44。

1977『沖縄、八重山の畑作とその儀礼』『跡見学園女子大学紀要』10: 43-65。

浮田典良

1974『八重山諸島における遠距離通耕』『地理学評論』47（8）: 511-524。